

WRV NEWS LETTER

WILDLIFE RESCUE VETERINARIAN ASSOCIATION

特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

No.104

2018.4.5 発行



野生動物救護獣医師協会は、保護された傷病野生鳥獣の救護活動を通じて市民の野生鳥獣保護思想の高揚をはかるとともに、地球環境保護思想の定着化を目指しています。そのために、常に世界の情勢を学び、会員相互の連絡、交流を行い、治療、研究および知識の普及をはかり、社会に貢献していくことを目的としています。

No.104 目次

馬場國敏先生を偲ぶ	2-3
馬場國敏先生への追悼文	4-12
新妻勲夫、中馬昌平、奥山正樹、関 健志、佐尾和子、上田一生、藤平 綾、柏木 聰、皆川康雄（敬称略）	
平成 30 年度「ヒナを拾わないで!! キャンペーン」	13
平成 29 年度 油等汚染事故対策水鳥救護研修 実施報告	14
馬場國敏先生の遺志を継いで	15
寄付のお礼	15
事務局日誌	15-16

馬場國敏先生を偲ぶ

前号にてご報告させていただきました通り、昨年 11 月 15 日に、馬場國敏先生がお亡くなりになりましたので、本号におきましては心より哀悼の意を捧げたく、これまでその時々で交流を持たれた方々による「追悼文」を、改めて掲載させていただくことに致しました。

なお本来ならば、数十人かそれ以上に上る方々に依頼すべきところではありますが、紙幅の関係から、ご執筆いただく方を敢えて限らせていただきましたので、その点につきましては、予めご了承賜りたく存じます。

また今回、WRV 神奈川支部の前副支部長でおられた中馬昌平先生より、馬場先生のご生前のご活躍を物語る一連の新聞記事をお寄せいただきましたので、まずはそれを以下に掲載させていただきます。中馬先生には、改めて厚くお礼申し上げます。

「追悼文」につきましては、4 ページ以降に順次掲載させていただきますので、会員あるいは読者の方々には、常に WRV の諸活動をリードしていただいた馬場國敏先生の在りし日のお姿と、大いなる足跡につきまして、暫し思いを馳せていただけると大変有難く存じます。

合 掌。

(WRV 事務局長 箕輪 多津男)

海と空一面真っ黒

決意

ひなすに暗く、黒い世界が広がっていた。「もう、見渡す限り真っ黒。遠くまでとどろいていて、まるで別の惑星にきたよう。気色悪い光景だった」

1991年、ペルシャ湾。川崎市中区下の獣医師、馬場國敏(68)が降り立ったのはサウジアラビアの沿岸だった。環境省に連言し、プロジェクトリーダーの命を受けた。海外での油污染の野鳥救護活動は、日本人として初の試みだった。発生から4カ月がたった。いたのに、事態は何も好転していなかった。どう黒い

海に近づき、目を凝らす。岩と思つていた塊は、油まみれになった鳥の死骸だった。丹念に歩いて、うごめく個体がいる。「現地は渡り鳥の中継点。次々と降り立つてくるんです。1羽

然に戻つてちゃんと生きろ。あれのは、6羽くらいか。面は小さな鳥のように広がっている。油にも野鳥は着く。油に汚染された野鳥の生存は、48時間ギリギリだ。当時、野生動物保護において欧米諸国に大きく遅れていた日本には、それを可能にする態勢もノウハウも皆無だった。

自分から自分がやるしかない。そうして馬場は日本の第一人者として歩んでいくことになる。

自らの動物愛護の信念を、病院にうつす。「私はドリトル先生の精神で、動物に接していきます。動物の言葉が分かる名医として、博愛と勇気で彼らの困難を救つていく児童文学の主人公が、馬場にとつての「先生」だった。

川崎市中区下 新城の馬場総合動物病院の馬場國敏医師が、今年5月に野生動物保護活動を巡る最大の受賞である「日本鳥類保護連盟総裁賞(環境省)を受賞した。多岐にわたって活動を経験する「川崎のドリトル先生」の半生を追った。(佐藤 将人)

1991年、サウジアラビアで重油にまみれた水鳥を取り上げる馬場医師

馬場國敏先生への追悼文

馬場國敏先生を偲んで

突然の訃報に、深い驚きと悲しみでいっぱいでございます。
馬場先生、悲しいお別れとなりました。

馬場先生は、平成 3 年より野生動物の保護、治療にご尽力、そしてボランティア活動に大いに
心を持たれた開業獣医師の仲間と、野生動物救護獣医師協会を設立され、理事、副会長の職責
に尽力頂きました。

設立された年に勃発した湾岸戦争時に、甚大な油流出事件が発生した際、環境省および日本
鳥類保護連盟のメンバーと現地に赴き、海鳥の救護にチームリーダーとして活動しました。その後、
スペイン、シェットランド島、南アフリカ、ガラパゴス諸島、韓国等においても油汚染鳥の救護、治療
活動に率先して参加。

国内においては、平成 9 年のナホトカ号座礁事故を初め、阪神淡路大震災、有珠山及び三宅
島での噴火事故、東日本大震災等におきましても重油の揮発性ガス、噴煙および放射線等におけ
る自身の健康の危険性をも顧みず、野生動物の調査、救護活動に尽力されました。

その他、獣医師会におきましては川崎市獣医師会会長として職責にまい進されました。また、野生
動物リハビリテーター研修の教育活動を展開され、神奈川県における野生動物のリハビリテーター
の養成に尽力されてまいりました。

これらの活動が評価されて、日本鳥類保護連盟総裁賞を常陸宮殿下より拝受されておられます。
その際には、WRV としても心からお慶び申し上げた次第です。

病を得られてから、先生とは、お電話では何度かお話が出来ましたが、闘病生活ということもあり、
先生が時折入院されたりして、お会いするにもご都合がつかず、結局、最後まで直接お会いするこ
とができませんでした。大変残念に思っております。

先生のお姿を思い出しますと、走馬灯のように先生が病院で、油汚染鳥のかもを用いて研修の
指導を行っていただいたこと等、種々懐かしく思い出されてなりません。

先生のご逝去は、悔やまれてなりません、WRV における素晴らしいご業績につきまして感謝を
申し上げ、心からの哀悼の意を表します。

ご遺族の方々は、さぞお嘆きのことでしょう。心からお悔やみ申し上げます。

やすらかに眠り下さい。さようなら。

誠に有難うございました。

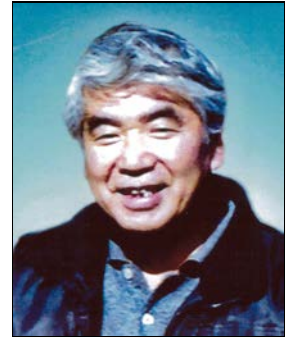
合 掌



平成三十年二月
野生動物救護獣医師協会
会長 新妻 勲 夫

馬場國敏君におくる

「馬場君、俺だよ中馬だよ。病気を治すのは自分だよ、君が主治医なんだから解るよね。君がかわいがっている動物たちが自宅で待っているよ。明日帰ろうよ。」と奥さんと何回か声をかけたとき、國敏君は少し目を開き、小さな声で「ハイ」と言ったね。あれから間もなく。あの時が忘れられません。



馬場君は麻布獣医大学の馬術部で、私の後輩です。獣医になってからは、私の動物病院で、自分の動物病院を開業するために頑張っていました。馬場君が開業して間もなく、動物の診療に多忙ななか、近くの多摩川で死にかかった野鳥が持ち込まれるようになったのがきっかけで、彼は獣医師として小さな命を助けようという責任感を強く意識し、やがて、病院の近くに野生動物ボランティアセンターを建てました。

馬場君の小さな命を助けようという野生動物保護活動の取り組みは根強く、1991年の湾岸戦争によるペルシャ湾の原油汚染にあえぐ動物を救うため現地入りを計画、環境庁を説得し、自らボランティアとして現地に入り、2か月間にわたり小さな命の数々を救う仕事に従事し、500羽ほどを野生に帰すことに成功した。また震災などにより被災した動物たちの救護にも力を入れており、阪神淡路大震災、新潟中越大地震、東日本大震災などの際には、いつでも被災地に赴き、現地でボランティア活動をしていました。とにかく馬場君は、動物の保護のためには、どんな時でも時間を無駄にせず、じっとしておれない人でしたね。

そうした功績もあって、2008年には環境省から「動物愛護管理功労者大臣賞」を受賞しました。また昨年5月には、日本鳥類保護連盟総裁・常陸宮殿下から「総裁賞」を受賞されました。

馬場君は少し短い人生でしたが、どんなことも理解し協力されていた奥様と、お父さんの後をしっかり引き継がれる素晴らしい息子さんがおられます。安心してお休みなさい。

馬場君、また会いましょうね

WRV神奈川支部 前副支部長
中馬動物病院 院長
中 馬 昌 平

馬場さん 追悼文

馬場さんとサウジアラビアに行ってから、早いものでもう 27 年もの月日が経った。初めてお会いしたのは、馬場さんが環境庁に、日本から水鳥のレスキューチームを派遣してほしいと熱心に働きかけていた、まさにその時だった。当時、油まみれのペルシャウの映像を見て、なんとかしたいと思った人は日本にも数多くいたはずだが、自分が行かなければと考え実際に行動したのは、馬場さんだけだったと思う。馬場さんの熱意とリーダーシップのおかげで、本当に派遣されることになった日本からの救護チームの一員に、私は幸運にも加わることができた。油汚染下での水鳥救護に関して、当時の環境庁には「サラダ油などで拭きメリケン粉をまぶして保温しアジなどを与える」という昭和 40 年代の通達が一本あるだけだった。せめて出発前にと、馬場さんの病院に行き、アヒルを使って洗浄方法を教わったのを思い出す。現在のようなインターネットもない時代で、現地の状況は断片的にしか得られなかった。戦争は終結しても油井は燃え盛っているとの報道の中、我々が持ち込んだ大きな荷物は、馬場さんの診療器具の他、大量の防塵マスクが占めていた。

馬場チームの隊員として環境庁から只一人派遣されたにも関わらず、英語もできないうえ、何の技術も持たず生意気なだけだった若造を、呆れて放り出すこともなく一ヶ月も一緒に活動し、無事に帰国させてくれた馬場さんが、当時まだ 40 代も前半だったかと思うと、本当に感謝の言葉しかない。



一生に一度の貴重な経験をしたと思って帰国した私だが、馬場さんにとっては全くそうではなかった。その後の馬場さんはあっという間に、国内外に油汚染事故があれば現場に駆けつける第一人者となり、救護獣医師協会の創設をリードし、そして災害時のペットのレスキューへと、次々と活動の幅を広げていかれた。ナホトカ号事故の際にも、「大変なことになりそうだ。とにかくすぐに行ってくるから。」と電話をいただいたのは、まだ被害の深刻さが明らかでない新年早々のことだった。

最後にお会いしたのは、それももう 10 年近く前のことになるが、某民放テレビ局の番組でのサプライズ企画だった。川崎の公園で回復した傷病鳥を放鳥する馬場さんの前に、関さんと二人で突然「馬場隊長～！」と呼びながら出ていくシーンを撮影し、放送も想像以上に多くの方が観ていて照れくさい思いをしたが、とにかく久しぶりに三人でお会いできたのは嬉しかったし、馬場さんもととても喜んでくれた。

そして、最後に馬場さんの声を聞いたのは、昨年夏。福島からかけた私の電話に、自宅療養中の馬場さんが出てくださった。久しぶりに会いに行きたいと言う私に、「ちょっと今は無理だなあ。元気になったらこっちから連絡するよ。」と言う馬場さんは、力をふりしぼって電話に出て下さったにも関わらず、福島でのこと、動物病院のことなど、ひとしきり話してくれた口調は以前と変わらず、まさかそれが最期になるとは思えなかった。「福島は色々大変だろうけど、奥山さんも頑張ってるよ。俺もまだ頑張るからさ。」と、その時も反対に元気づけられてしまった。

思えば馬場さんには、最初から最後まで、勇気を教えられ、元気をもらうことばかりだった。そして、69 年という人生の中で、馬場さんはいったいどれだけの動物たちの命を救ったのだろうかとあらためて思う。今いるところでは、ようやくゆったりと、救護も治療も必要としないたくさんの動物たちに囲まれているだろうか。

これからも隊長は遠くから見守っていてください。心からご冥福をお祈りしています。

環境省 奥山正樹

馬場隊長ありがとうございました

1991年4月、42才の馬場さんと24才の奥山さん、27才の私。3人でサウジアラビアへ飛んでから27年が過ぎた。

この年の初め、日本の茶の間のTVには、リアルタイムでスカッドミサイルの閃光が飛び交う戦場が流れ続けていた。中でもペルシャ湾が原油で覆われ、ギトギトになった水鳥達の悲惨な画像は衝撃的だった。私を含め多くの日本人がなすすべもなくうつむいている時に、馬場さんは1人動き出していた。



外務省や環境庁等の関係機関に出向き、獣医師としての自分をペルシャ湾に派遣しろと訴えていた。戦争中にもかかわらずだ。巻き込まれた生き物たちを助ける必要があるんだと。馬場さんのそんな動きが、当時の私の職場であった日本鳥類保護連盟にも入ってきた。私はTVの画像の衝撃よりも、そんなことを考える大人の男がこの日本にいることに衝撃を受けた。まさかその後、そんな大人の男と一緒に1か月もの間、湾岸野生生物救出隊の1員として、ペルシャ湾に派遣されるとは夢にも思わなかったが。現地での活動はすべてが初めての事で、あたふたしながらも、なんとかやり遂げられたのは、獣医師として、各国からの派遣要員をもまとめていた馬場さんのおかげだった。



今夜、十数年ぶりに当時の資料が入ったダンボール箱を開けた。チャック付きのビニール袋に入った油漬けの1枚の羽が出てきた。油まみれになって死んでいったペルシャウの羽だ。真黒な油漬けの羽を見ながら思い出したのは、なぜだか穏やかなサウジの風景だ。

我々の活動拠点であったレスキューセンターの裏庭にイスを出し、座っている馬場さんと奥山さんと私。休憩時間に裏庭で祈る現地の仲間の姿も日常となっていた。スピーカーからの、やけに大きな音で流れるコーランもなぜだか心地よくなっていた。馬場さんはそんな時、何度となく言っていた。「我々3人はまさに戦友だな」と。当時の私と奥山さんはうまく返事ができずに、暑く乾燥はしていたが穏やかに吹く風に浸っていた。

久しぶりに出したギトギトの羽を見る視界がぼやけ、鼻の奥がツンとしてきた。馬場隊長、本当にありがとうございました。

環境省で今も働いている奥山さんと2人、馬場さんの戦友として恥ずかしくないよう、もう少し頑張ります。

公益財団法人 日本生態系協会

関 健 志

馬場國敏先生を偲んで

馬場先生の訃報のメールをいただいた時は、本当に驚きました。あの元気な先生が、どうして？と。病院で忙しく働いていらっしゃる白衣のお姿と大きなお声が、今でも思い浮かびます。そしてごぶさたのうちに逝ってしまわれたことに、心より残念で申し訳なく思います。

先生との出会いは、もう 20 年前に遡ります。

1997 年 1 月、ロシアのタンカー、ナホトカ号が福井県沖で沈没し、大量の重油が流出しました。その折、油回収ボランティアとして福井県や能登半島に出かけ、ことの重大さに愕然とし、記録の本を出版することを計画しました。

この事故では、多くの海鳥たちが油にまみれる被害に遭っていました。その鳥たちの救護に当たられたのが、馬場先生でした。先生は、湾岸戦争での油汚染による野生動物救護の経験を生かして、迅速に救護体制を立ち上げられたのです。油流出事故でまず影響を被るのは、海に棲む生き物たちです。海鳥の救護は、どうしても記録しておかなければならないことでした。

一面識もない先生に、原稿の執筆を引き受けていただけたのかと、ドキドキしながらお電話をかけたことが思い起こされます。電話口からの快活なお声にほっとし、快くお引き受けいただいて、早速馬場動物病院をお訪ねしたのは、確か暑い夏の盛りだったと思います。お忙しい先生にとって原稿の執筆は大変だったことと思いますが、事故時の対応から、救護マニュアルまで、次に必要になったときに役にたつ情報をわかりやすくまとめてくださいました。貴重な記録を残していただけたことは、本当にありがたいことです。

1998 年末、先生の「水鳥の救護」を含めた総合的な油汚染の本として『重油汚染—明日のために』を出版することができました。

ナホトカ号の事故の後に、病院のすぐ近くに野生動物の救護と入院設備を備えた「川崎野生動物ボランティアセンター」を設立されました。ボランティアも宿泊できるようになっていたと思います。先生の思いのこもったこのセンターでの打ち合わせ、そして、その後何度もお邪魔したことをなつかしく思い出します。小学校の教師をしている娘も生徒を連れて、総合学習の授業でお訪ねしたそうです。子どもたちへの実体験に基づく教育の場でもあったわけです。

今年 1 月、東シナ海でタンカーが沈没し、大規模な油流出事故が起きました。鹿児島から沖縄に連なる島々に大量の油が漂着しているようです。海の生物への被害も大きいのではないかと危惧しています。先生がご存命であればきっと駆けつけておられたのでは、と想像しております。今までの体験が生かされることを願っております。

馬場動物病院では、年中無休 24 時間体制で診療にあたっていると知った時には、我が家の愛犬が夜中に苦しみながら亡くなった時のつらい体験を思い出しました。どんなにお医者様に看ていただきたかったことか、先生のようなお医者様が近くにいらっしゃったら、どんなに救われたことかと思いました。

2011 年の東日本大震災では、置き去りにされ放浪している被災犬や被災した動物たちの救出のために、福島においでになっていたとうかがいました。そこで多くの犬や猫や動物たちを助けながら、『さくら』を執筆されたのですね。読み続けることがとてもつらい本です。人間の引き起こす過ちの犠牲になるのは、常に何の権利も補償されていない動物たち、その立場に立ち続け、代弁者となってこられた馬場先生。沢山の先駆的なお仕事を残され、精一杯生き抜かれたのだと思います。ありがとうございました。

今頃天国でたくさんの動物たちに囲まれて、元気に過ごしておられるのではないのでしょうか。あの大きなお声でみんなに語りかけながら・・・。

先生のご冥福とご家族の皆様のご健康を心よりお祈り申し上げます。

合掌

(株) 海洋工学研究所 佐 尾 和 子

馬場國敏先生と洗ったケープペンギンは力強く生きている

馬場國敏先生との最初の出会いは、成田空港でした。それから2週間弱、南アフリカのケープタウン周辺で「重油汚染されたケープペンギンの救護活動」を支援したのです。一緒にしながら、野生動物救護のスペシャリストでいらした先生から実に多くの教えを受けました。筆者の「ペンギン研究・保全活動」は、間もなく48年目を迎えます。1994年8月の出来事は、私の「ペンギン人生」の基礎を築いたものであると同時に、野生動物に情熱と人生とを捧げるということはどういうことなのか？…馬場先生の背中から強いメッセージをいただいた、なにものにも替えがたい貴重な体験でもありました。

1994年6月下旬、南アフリカのケープタウン沖に沈没していた鉱石運搬船「アポロシー号」から、大量の燃料用B重油が流出。ベンゲラ海流と強い西風に流された「黒い海流」は、南アフリカ南西岸に生息する海生動物に襲いかかったのです。多数、多種類の海鳥や海生哺乳類、魚類などが、この人災の犠牲になりました。とりわけ世界の耳目を集めたのは、当時16万羽に個体数が激減していたケープペンギン(アフリカンペンギンともいう)の種としての存続の危機でした。1980年代から現地NGOを支援していた私の所属する「ペンギン会議」は、即座に日本国内で現地の救護活動を支援する募金活動を開始し、最終的に300万円を超える浄財をお預りしました。その途中に、馬場先生からお電話(まだメールがなかった時代です)を頂戴し、寄付金を現地に届けると同時に、救護活動に参加するという決断を下したのです。南アフリカに世界中から集まった多くの同志が、馬場先生の果敢な活動姿勢に大変感銘を受け、そのエネルギッシュな救護ぶりに感嘆したのは言うまでもありません。

実は、南アフリカでは、この後2000年にも重大な重油流出事故が起きました(「トレジャー号事件」)。しかし、1994年に確立された基本的救護メソッドが、ペンギンやほかの動物の犠牲を最小限に抑える効果を発揮しました。その技術的進展に、馬場先生の活動が貢献していることは明らかなです。野生動物の救護に情熱を注がれた馬場先生の遺産は、力強く生きているケープペンギンたちだけでなく、南アフリカの野生動物や自然を愛する全ての人々に継承されているのです。馬場國敏先生、どうか生き物と人々の命とを見つめ続けて下さい。

本当にありがとうございました。

ペンギン会議・PSG 委員 上 田 一 生

馬場先生を偲んで

君よずっと幸せに
風にそっと歌うよ
愛は今も愛のままで

まさかー。

あの、エネルギーで豪快で、動物を愛してやまない馬場先生がー。

最初に訃報を受けた時、驚きのあまり言葉も出ず、何と言えよいいのかすらわからず、ただただ茫然としてしまいました。

日本財団の助成により WRV が主催していた「油汚染鳥救護等に関する専門獣医師の養成講習」の一環として、私が川崎にある「野生動物ボランティアセンター」で実習をしていた頃、馬場先生が柴犬達のお世話をしながら、福山雅治さんの曲をかけ、歌っていらっしゃいました。先生に「若い歌を聴かれるんですね」と言うと、先生は「カラオケで毎回同じ曲じゃ芸がないからな。こうしてこっそり練習してるんだ」と、優しく柴犬達の相手をしながら、茶目っ気たっぷりに、少し照れたようにおっしゃった姿を思い出します。

月日は流れ、東日本大震災後、獣医師による警戒区域内でのペットの捕獲活動に参加した際に現地で一緒に、動物達の為に動きたい、という志のみならず、お年を重ねてもなお、自ら第一線で活動に参加し行動されるという姿に、感銘を受けました。

その後、私自身は福島県動物救護本部に収容された犬猫達のお世話のボランティアを行っていたので、残念ながら、馬場先生とそれ以来、現地で一緒にすることはありませんでしたが、精力的に活動されているというお話は聞いておりました。それがまさか、このような形でお別れをすることになるとは思ってもおらず、突然の訃報に、夏に出産した娘にも会っていただきたかったと、後悔の念で一杯です。

君よずっと幸せに
風にそっと歌うよ
愛は今も愛のままで

季節はもう春。

この歌が流れる度、馬場先生の歌声が、今にも聞こえてくるような気がしてなりません。
馬場先生。

まだまだ我々では頼りないでしょうが、若者達も頑張って先生のご遺志を継いでいきますので、どうぞ安らかにお休みください。

ご冥福をお祈り致します。

シンバイオ製薬株式会社 藤 平 綾

馬場國敏先生を偲んで

「1991年の湾岸戦争で油にまみれた水鳥を助けるため、馬場國敏という獣医師が、環境庁が派遣するチームの団長として、サウジアラビアに飛んだ。」という神奈川新聞の記事を読め、格好いい人がいるものだ。自分も勤めを辞めた後の人生を、どう過ごそうかと色々考えていた頃でした。これだと思いました。この時から、退職後には自分も、野生動物救護に関わるようなことをやろうと思うようになりました。それ以来、馬場先生の名前は頭の片隅にしまわれてきました。

いよいよ2007年に、神奈川県の家畜保健衛生所を最後に定年退職しましたが、気持ちは変わりませんでした。しかし、野生鳥獣の救護活動を志したのはよいが、野生動物に対する知識は皆無でした。野生動物の性格、習性、どんな餌を食べるのか等基本を学ぶことが必要と思い、母校の麻布大学で先生をしている友人に研修先を紹介してもらったり、インターネットで検索してあの馬場先生が開設している「野生動物ボランティアセンター」を見つけたりと準備していました。しかし、あの馬場先生がやっていると思うと、何だかすごく敷居が高くて、ぐずぐずしているうちに、運よく野生動物リハビリテーター(第三期)養成講習会募集の記事を新聞に見つけて受講しました。講習会場に行ってみたらビックリ。いきなり馬場先生との初顔合わせとなりました。思っていたより気さくな先生で、こんなだったらもっと早くボランティアセンターの門をたたけばよかったと思ったことでした。講習会終了後もスキルアップのため、一年間野生動物ボランティアセンターと馬場動物病院で研修させて頂きました。研修当初は、具体的に何処でどのように野生動物の救護活動をするかまでは明確ではありませんでした。そんな中、馬場先生から、「開業する気があるなら使っていない器具、機材があるから全部上げるよ。」という申し出を受け、本当かなと半信半疑でしばらく忘れていたところ、二か月位たった時、先生から「あの話どうだ。要らないならよそに回すけど。」と言われて、これは夢ではなかったんだ。本当の話だったんだ。と理解した瞬間開業を決意して、有難く頂くこととしました。

その後も、横浜市立金沢動物園の動物病院で、野生動物の救護や飼育動物の臨床などを勉強し、箱根町仙石原で「仙石原野生鳥獣クリニック」を2009年1月に開院しました。私が、今こうして箱根仙石原の地で、野生鳥獣に関わる仕事をしながら充実した日々を送れるのも、馬場先生のお陰と感謝している次第です。リハビリの終わったトビを多摩川沿いの崖地まで車で運んで行って、先生がトビの足を掴んで崖から放り投げると、ダイナミックに翼をバサバサと音をさせ羽ばたいて飛び立って行きました。この放野した時の感動が、今でも懐かしく思い出されます。

先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

仙石原野生鳥獣クリニック

柏 木 聰

馬場國敏先生を偲んで

馬場先生の存在を初めて知ったのは、私が麻布大学生の時でした。大学構内の掲示板に『ケガした野鳥を治療して再び野生に帰す 川崎市の動物病院開業医』と題した新聞記事で、本学卒業生としての紹介でした。「野生動物を扱う OB がいる！」と野生動物の獣医師を目指していた私にとって、衝撃を受けたことを今でも覚えています。

大学卒業の年（平成 3 年）には、湾岸戦争によるペルシャ湾での油汚染鳥を救うために現地で活躍されている馬場先生を報道で知り、あこがれの存在として強く意識するようになりました。

その後、国内でもナホトカ号油流出事故やダイヤモンドグレース号油流出事故が起こり、馬場先生は、私財を投じて本格的な救護活動拠点「野生動物ボランティアセンター」を平成 10 年に開設されたのでした。そして、このセンター開設を機に、私はあこがれの馬場先生とのお付き合いが始まったのです。“ボランティアセンター”という名称は、先生がペルシャ湾での救護活動の際、海外ボランティアの意識の高さに触発されて付けたとお聞きしたのですが、当時の私には、ボランティアの重要性を理解することはできませんでした。ところが、その後縁あって先生が理事を務める WRV に初の正規職員として採用されると、図らずもその年(平成 14 年)の暮れに、スペインにてプレステージ号による世界規模の油流出事故が発生し、国際協力の名のもとに、私が現地に派遣されることになったのでした。そこで、初めて海外の野生動物リハビリテーター（資格を持つボランティア）の存在を目の当たりにし、帰国後馬場先生に話したところ、「俺は 10 年以上前からわかっていたよ」と笑顔で答え、「よし、俺が段取りしてやるから、お前のイメージするボランティアをつくれよ」…。先生はたちまち神奈川県と話をつけ、WRV 神奈川支部を立ち上げ、自ら支部長として陣頭指揮をとり、翌年（平成 16 年）には全国初となる野生動物リハビリテーター認定制度を創設させたのでした。と同時に、ボランティアセンターをリハビリテーターの実践活動の場として提供し、先生自ら徹底した指導により、海外にも引けを取らないボランティアに育て上げたのでした。馬場先生の指導により認定したリハビリテーターは、これまでにのべ 250 名を超えます。

こうして野生動物救護の分野で我が神奈川支部が、業界をつねにリードし続けることができているのは、馬場先生の先見性と行動力の賜物であったとはっきり言えます。私にとって、このように大きな存在を失うこととなり、まさに痛恨の極みです。そして、馬場先生から直接認定書を受け取って活動しているリハビリテーターたちにとっても、同じ思いに違いありません。馬場先生が示されたこれまでの訓えを胸に、しっかりと受け継いでいくことをここにお誓いします。

馬場先生、どうか高いところから私たちとリハビリテーター活動を見守っていてください。私たちも馬場先生の白衣姿を絶対に忘れません。先生のご冥福を、指導を受けたすべてのリハビリテーターとともに心からお祈り申し上げます。

WRV 神奈川支部長 皆 川 康 雄

◆平成30年度「ヒナを拾わないで!! キャンペーン」◆

WRV事務局長 箕輪 多津男

WRVでは、(公財)日本鳥類保護連盟及び(公財)日本野鳥の会との共催により、平成30年度も変わらず、「ヒナを拾わないで!! キャンペーン」を展開しております。

本年度のキャンペーンに関して、当協会あてにご協賛いただきました団体(または企業)は、それぞれ以下の通りとなっております。ポスターにも既にご芳名を掲載させていただいておりますが、今回も各位より多大なるお力添えを賜わり、誠にありがとうございます。ここに、改めて深く感謝申し上げます。

<ヒナを拾わないでキャンペーン／協賛団体リスト> (43団体：五十音順)

公益社団法人 愛知県獣医師会
公益社団法人 石川県獣医師会
おおくぼ動物病院
公益社団法人 大阪府獣医師会
公益社団法人 岡山県獣医師会
公益社団法人 岐阜県獣医師会
公益社団法人 京都府獣医師会
公益社団法人 神戸市獣医師会
公益社団法人 滋賀県獣医師会
NPO 法人 自然環境アカデミー
高尾霊園犬猫墓地
公益社団法人 東京都獣医師会
公益社団法人 名古屋市獣医師会
公益社団法人 新潟県獣医師会
公益社団法人 日本獣医師会
馬場総合動物病院
文永堂出版 株式会社
公益社団法人 三重県獣医師会
武蔵村山ペットメモリアルパーク
森久保薬品 株式会社
公益社団法人 山口県獣医師会
公益社団法人 和歌山県獣医師会

公益社団法人 秋田県獣医師会
一般社団法人 茨城県獣医師会
公益社団法人 大阪市獣医師会
大宮国際動物専門学校
公益社団法人 北九州市獣医師会
公益社団法人 京都市獣医師会
株式会社 キリカン洋行
国際動物専門学校
公益社団法人 静岡県獣医師会
全国愛鳥教育研究会
東京環境工科専門学校
中津動物病院
公益社団法人 奈良県獣医師会
新妻動物病院
公益社団法人 日本動物病院協会
一般社団法人 兵庫県獣医師会
公益社団法人 北海道獣医師会
一般社団法人 宮崎県獣医師会
ムナテックス 株式会社
野生動物リハビリテーター協会
公益社団法人 横浜市獣医師会

会員の皆様には、このニュースレターとともに本年度のポスターを同封させていただきましたが、本キャンペーンの主旨をお汲み取りいただき、これからもその普及啓発のためにご協力いただければ幸いに存じます。

生物多様性の保全、そして生態系の保全を将来に向けて確かなものにしていくことが、何より私たちの大きな目標となっております。

WRVでは、様々な課題が山積する中、そうした目標の実現に向け、末永く活動を展開していきたいと考えております。同時に、傷病野生鳥獣の救護活動につきましても、地道に努力してまいる所存ですので、皆様のご支援とご協力を、今後ともよろしくお願い申し上げます。



平成 29 年度油等汚染事故対策水鳥救護研修 実施報告

WRV 事務局 齊藤 量子

平成 12 年度から、環境省の主催により毎年開催している油等汚染事故対策水鳥救護研修ですが、今年度も引き続き、東京都日野市の環境省水鳥救護研修センターにて、第 1 回を平成 29 年 10 月 10・11 日、第 2 回を 11 月 21・22 日、第 3 回を平成 30 年 1 月 18・19 日に開催しました。

北は北海道から南は福岡県まで、また獣医師、動物園水族館関係者、鳥獣保護行政担当者、環境保護団体関係者など、様々な地域や立場の方々に、多数ご参加いただきました。

講義では、都道府県の油等汚染事故対応を始め、油等流出事故の基礎知識や油の処理法、水鳥の生態、油汚染鳥の救護法等、幅広い内容を対象に、各方面の専門家に、その都度経験談を交えながら分かりやすく講演していただきました。さらに実習として、重油の特性実験やアイガモを用いた身体検査及び洗浄作業、水鳥救護専用のリハビリプール「ワイルドライフ・レスキュー・システム」の展張・撤去作業等を行いました。

また平成 29 年 12 月 7 日、佐賀県(佐賀県庁内の会議室)において現地研修を開催しました。佐賀県は近年、国内有数である水鳥にとっての渡りの中継地「東よか干潟」が、ラムサール条約に登録されたこともあって注目が集まっており、さらに本研修が開催されたことが無いことなどから、今年度の現地研修開催地として選定いたしました。

研修終了後も、参加者各位が、実際事故が起きた時自分はどう動けるか、現時点での問題点など、今後についての前向きなお話をされる様子が見え、大変有意義な研修会になったことと確信しております。

今年度研修にご参加頂いた方々には、得られた知識、技術や人脈を、水鳥救護における体制作りや現場での活動に活かしていただけますよう心より願っております。

最後になりましたが、研修開催に当たり多大なご協力を賜りました、(一財)海上災害防止センター、日本災害情報センター、(公財)日本野鳥の会、佐賀県農林水産部生産者支援課、野鳥の会佐賀県支部の皆様方に、心から御礼申し上げます。



生体を用いた実習



現地研修講義風景



環境省九州地方環境事務所
所長からのご挨拶（現地研修）

馬場國敏先生の遺志を継いで

本号におきましては、「馬場國敏先生・追悼号」といった形で編集させていただきましたが、各位には、それぞれの思いが去来されたことと存じます。

なお、馬場先生が先に設立され、当面の売却が検討されておられた「野生動物ボランティアセンター」につきましては、先生の遺志を継ぐという意味合いも込め、「馬場國敏メモリアル会館」という名のもとに、新たな形の活動拠点として再建されることになりました。

馬場総合動物病院を継がれた、馬場智成・新院長を中心に、今後の方針について順次検討されていくようですので、当協会といたしましても、神奈川支部とともに、できる限りのご協力をさせていただければと考えております。

いずれに致しましても、馬場國敏先生のご遺志を継いで、将来に向けた人と野生動物とのよりよい関係の実現を目指して、これからも精進してまいる所存です。会員の方々におかれましても、今後ともご協力の程、改めてよろしくお願い申し上げます。

(WRV 事務局長 箕輪 多津男)



韓国での油汚染事故対応(2007年12月)

現地での馬場國敏先生と野村治先生

【 事務局より寄付のお礼 】

寄付ご協力者(敬称略) (平成29年12月1日から平成30年2月28日)

○寄付金(一般) 2017.12.19 白倉 豊 5,000 円

○寄付金(神奈川支部) 2017.12.30 地球はともだち・影絵プラネット 3,000 円

2018.2.26 神山真人 5,000 円

事務局日誌 2017.12.18～2018.3.20

=== 12月 ===

18: 鳥獣被害対策成果発表会(群馬産業技術センター)

出席: 羽山、梶ヶ谷、加藤

23: 野生動物救護獣医師協会 講習会[東京都支部](東京環境工科専門学校)

講師: 梶ヶ谷、出席: 新妻、小山、倉林、中川、皆川、小森、齊藤、箕輪

25: WRV ニュースレターNo.103 発行

対応: 小松、箕輪、齊藤

27: 平成29年度東京都外来鳥獣(アライグマ・ハクビシン)防除対策検討委員会 第2回作業部会(東京都庁)

出席: 加藤

=== 1月 ===

06: わいわいサロン(県民活動サポートセンター)[神奈川支部]

対応: 皆川

13: 東京港野鳥公園・油汚染事故水鳥救護講習会[東京都支部]

対応: 新妻、大窪、皆川、箕輪

14：練馬区獣医師会 新年会（メトロポリタンホテル池袋）	出席：新妻、倉林、町田
16：丹沢自然保護協会 理事会（秦野市）〔神奈川支部〕	対応：皆川
18～19：第3回油汚染対策水鳥救護研修（水鳥救護研修センター）	対応：新妻、皆川、箕輪、御厨、齊藤
21：ジャパンフィッシングショー（パシフィコ横浜）〔神奈川支部〕	対応：皆川
25：練馬西青色申告会 懇親会（メトロポリタンホテル池袋）	出席：新妻、町田
25：朝日新聞 eco 欄 野生動物の交通事故対策にてタヌキアプリ紹介〔神奈川支部〕	対応：皆川

=== 2月 ===

03：獣医疫学会 役員会（東京大学弥生キャンパス）	出席：加藤
03：日本コウノトリの会 意見交換会（栃木県小山市）	出席：箕輪
08～12：さがみ自然フォーラム（アミューあつぎ）〔神奈川支部〕	対応：皆川
10：平成29年度日本獣医師会学会（国際コンベンションセンター）	出席：新妻
10：夢見ヶ崎動物公園基本計画(案)説明会（夢見ヶ崎動物公園）〔神奈川支部〕	対応：皆川
14：平成29年度東京都アライグマ・ハクビシン対策普及セミナー（都民ホール）	対応：加藤
16：平成29年度山梨県特定外来生物(アライグマ)対策検討会（山梨県庁防災会館）	出席：加藤
16～18：島根県傷病鳥獣救護研修会（主催・しまね野生鳥獣救護ボランティア）	講師：皆川
21：WRV会計に関する打合せ（立川事務所）	対応：小森、箕輪
21：平成30年度「ヒナを拾わないで!! キャンペーン」協賛申込み・締切り	対応：箕輪
24：神奈川県野生動物リハビリテーター13期生認定式（県民活動サポートセンター）〔神奈川支部〕	対応：皆川、箕輪
24：神奈川県野生動物リハビリテーター研修（県民活動サポートセンター）〔神奈川支部〕	対応：皆川、箕輪

=== 3月 ===

03：WRV 監査、WRV 東京都支部監査	出席：新妻、倉林、町田、小森、箕輪
03～04：動物たちの SOS 展「ヒナを拾わないで！」（横浜市立野毛山動物園）〔神奈川支部〕	対応：皆川
04：特命子ども地域アクター成果発表会（横浜市関内）〔神奈川支部〕	対応：皆川
05：JEDIC 理事会（(公社)日本海難防止協会）	出席：箕輪
07：山梨県アライグマ捕獲従事者養成講習会（山梨県庁防災会館）	出席：加藤
07：安全安心領域シンポジウム（富士ソフトアキバプラザ）＜災害動物医療研究会＞	出席：羽山、皆川
17：第51回獣医疫学会学術集会・総会（東京大学弥生キャンパス）	出席：加藤

野生動物救護獣医師協会（ホームページ）<http://www.wrvj.org/>（E-mail）kyugo@wrvj.org

NEWS LETTER No. 104 2018.4.5 発行

発行：特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

事務局：〒190-0013 東京都立川市富士見町 1-23-16 富士パークビル 302

TEL: 042-529-1279 FAX: 042-526-2556

発行人：新妻 勲夫 編集文責：小松 泰史 編集担当：箕輪多津男
